



2015・2・3

**SORA** 59号

# 空 洞

柴 田 佐知子

生国を共に離れし雛飾る

相愛と思へぬ雛を飾りけり

雛の眼に見ゆるこの世の狭きこと

雛壇の下の空洞鬼が凄む

子が各前付けし雛も流ざるる

冴返る洞に異国の神隠し

ものの芽や首塚の風堂塚へ

絵踏みして荒灘の魚追ひにけり

桜咲く島に国民と警棒と

馬鹿貝の悔しき舌と思ひけり

向こう三軒老人がゐて桃の花

手叩くと這うてくる子や春の雪

花すもも頭もて牛の子押し返す

囀の中に故郷があると言ふ

土筆籠大きな河は音立てず

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

母に会ふことはもうなし春を待つ

返事して鳩の蹤きくる春隣

探梅の空ばかり見て終りけり

春めくや竿の夕オルの膨らみも

チューリップ裾ひるがへるものを着て

蒼天の富士の見送る卒業歌

一人来て大地の窪を耕せり

控へ目に雨の降るなりヒヤシンス

褒められてばかりの頃のげんげかな

笹敷きて勢ひ添へたる桜鯛

家族みな揃ひてゐたる春の夢

箸置きの小枝の粹や花菜漬

針に糸すぐに通りにてあたたかし

いのちいつまで陽炎に立ち止まる

まだそこに母の居さうな春障子

桜湯や絹座布団の嵩ゆたか

長崎 荒井千佐代

福岡 柴田志津子

子落し崖海に突き立て山眠る

百年を経し校庭に風揚ぐる

上げし髪一と日にほつれ久女の忌

源流は雲の中なり白魚川

一人寝や山焼く焰まなうらに

鹿尾菜刈る危ふき岩をひとつ越え

あをあをと今朝の灘なり雛飾る

この橋の向うは他郷ねこやなぎ

抱く猫の朱に染まりてらんたん祭

落城に果てし幼子水草生ふ

橋ひとつ渡りて雛の日の宴へ

げんげ田に倦きたる牛の鳴きにけり

満潮の海の鈍色花だいこん

何も無きてのひら春の野にひらく

舟波に我が影崩れ聖木曜

杖ついて来てぶらんこを漕いでゐる

埼玉 服部 早苗

ボルシチの湯気取り分くる女正月

男体山に白根山つらなる冬田かな

寒明のあさひ新しゆでたまご

薄氷の解けみんなみに飛行船

巻き簾干す春逡巡の日の中に

春潮のひかりに包む握り飯

消滅の星のそののち風信子

耳朶のゆたかに紅く涅槃雪

福岡 だいじみどり

バイク屋の小父さんと見る初桜

竹林はそよぎ花粉の杉直立

ながながと入学式の式辞かな

飾り焚きたる残り火を囲みけり

春野より天満宮の赤い橋

凧揚げの父子の駆ける都府楼址

豆撒きを見てゐるのみの東長寺

目の前に梅のほころぶ露天風呂

福岡 野上 杏

北九州 深川 淑枝

水温むころに別れし記憶かな

杭の鵜へさざなみ通ふ余寒かな

牡丹の苔をすべる雨の粒

船過ぎしあとの波くる雁供養

知恵湧くと思ふ朝なりパセリ食む

春昼や足音砂に吸はれぬて

道違ふことも楽しや葱坊主

風葬の骨片白き海市かな

ついでにと露の臺まで案内さる

荒東風や舷に星近かりし

腰振りて歩く烏や梅の花

貝焼の煮こぼれて海荒れをりし

陽炎へる一枚岩の手水鉢

川音に日暮降りくる種選

野良猫の餌ポケットに卒業す

道尽きて雪解雫の坊の跡

兵 庫 戸 栗 末 廣

寒林の丸ごと水に映りぬる

三月の海が光りて鳶の笛

初蝶の息ととのへてゐるところ

摘草やひらひら渡る丸太橋

夕日へとつづく轍や大石忌

いかなご漁けふ解禁の海の色

蛇穴を出て全長をもて余す

よく遊びよく働きし春の月



糸田 宮井 知英

桜東風眼下に烟る稚児落し  
花うばら鎌を研ぐ水地へ流す  
風除を解きたる鶏屋の頼り無し  
ドリーネの底の水音百千鳥  
魚ゐる処ふくるる春の水

大森 田岡 千章

合掌に終ふ大寒の太極拳  
寒月光学舎に吹奏楽部の灯  
四日はやふたり普段の箸の色  
礎にアンモナイトや街冴ゆる  
恥らへり告白の息白きこと

粕屋 秋 千晴

三寒も乾布摩擦の保育園  
風車買ひてより子がよく走る  
風車向きを変へてはまた走る  
菜の花やわづか五分の渡し舟  
紅梅やお産準備の整ひし

千葉 原 友子

宿坊の分厚き框蔵開き  
凍滝を見て来し夜の床柱  
冬川に浸せし魚籠が何か云ふ  
立ち枯れの木の吼えさうな寒の月  
あひみてののちの歳月頬かむり

東京 山田 正子

春の雪紅緒の下駄に消えにけり

ゆるゆるの形見の指輪花柎

寒月光灯のなき家を照らしけり

アネモネの疑ひ深き黒き芯

春日傘翼のやうに開きけり

福岡 田代 貞枝

灯を消して雪積む音を聞いてをり

どんな時も人は笑へるおぼろかな

長閑しや僧は私服も黒づくめ

亡き夫の話をすれば時雨けり

寡婦といふ欄に記せり隙間風

福岡 矢野 百合子

手放すと決めし郷里の初明り

繭玉の触れてやさしくなりみたり

霾や菩薩も在す骨董市

枯枝を枯色雀思ふまま

独り者同士に弾む初電話

長崎 松尾 龍之介

(鳳蜜華改め)

厳冬を受け入れてゐる野面積み

春を待つ卵の殻を土に混ぜ

わたくしが動けば動く梅の花

春めくや手足せはしき小型犬

滴々と若草色に柳の芽

## 第4回「空新人賞」受賞

天谷 翔子



雪螢とべばたれかれやさしくなる

檻の鷹いくたび呼べど振り向かず

石路咲いて日の当たりぬる躡り口

叱られし顔を上げずに葛湯吹く

流れ来しものを加へて川焚火

山よりも高き卒塔婆冬の鵞

隣り合ふ墓の落葉も掃きにけり

百畳に正座三百着ぶくれて

枕固し夜通し霜の育つ音

水温む母に許されたる思ひ

朝寝してけふの終はりし心地かな

船を待つ列に風船加はりぬ

沈丁花夜の団地に迷ひをり

春障子越しに聞かれし昨夜のこと

朝の日の降りそそぎある泉かな

骨に皮張り付いてゐる蛇の貌

払ひたる火蛾の銀粉浴びにけり

漂流の気分浮輪に目つむれば

涼しくて細き足首手首かな

蜘蛛と生れ搦めとりたき人のあり

風鈴や明日の目覚めを疑はず

飲食の卓汚しをり終戦日

甘さうな水蜜桃といふ言葉

白桃を水の重さと思ひけり

仏壇のあかりのやうに桃ひとつ

集まつて遊ぶ老人草の絮

袖で柿ぬぐうて父祖の地は遠し

浅瀬に手すすぎて秋の遍路かな

心中の如し花野に横たはり

鳥葬の供華ならば白まんじゆさげ